

JAELE Newsletter

上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

July 5, 2018

No. 19



JACK & BETTY



燕市教育委員会学校教育課
指導主事 廣川 統
(平成 24 年度修了生)

私は、新潟県の中学校教員として、小学校外国語活動が高学年で必修化された平成 23 年度から 2 年間、大学院に派遣され、お世話になりました。その間、小学校英語に興味をもち、北條ゼミに入れていただきました。北條先生のもとで、カエルTシャツを着て幼稚園や小学校で授業をしたり、文字指導について研究をしたり、大変貴重な経験をさせていただきました。現在、行政の立場で高学年の英語教科化等に取り組んでいますが、大学院時代の経験が本当に今の自分の支えとなっています。

さて、タイトルの Jack & Betty ですが、この名称を聞くと、英語教育に携わる人や、ある一定世代以上の方は、戦後間もない頃の英語教科書の名前を連想すると思います。ですが、燕市では現在、市が行っている英語教育事業（英語教室、スピーチコンテスト、サマーキャンプ、海外派遣等）の通称として定着しつつあります。それはなぜかという点、1992 年に放映された TV ドラマ「ジャック・アンド・ベティー物語」に由来しています。

このドラマは、洋食器で有名な燕市を舞台に、昭和 20 年代から 40 年もの間、アメリカに追いつき追い越そうと努力した人々の姿が描かれています。この頃、国定教科書に代わり、民間が編集した検定教科書「Jack & Betty」の使用が始まり、アメリカの文化や豊かな生活が生き生きと描かれたこの教科書を、貧困にあえいでいた当時の日本の若者は情景の念をもって見つめていたそうです。それから十数年後、燕の洋食器の輸出は 10 倍以上に伸び、「日本一社長が多いまち」ともてはやされました。

この頃の燕市民の情熱を現在の英語教育に受け継ぎ、燕市の未来を担う人材の育成を目標に 5 年前から「Jack & Betty プロジェクト」という英語教育事業をスタートさせ、多くの事業が軌道に乗ってきたところです。例えば、スピーチコンテストを勝ち抜いた小中学生が親善大使として海外に派遣され、燕市の PR 活動を行っています。次はその一例です。



In 1991, Yamazaki tableware was selected to be used at the commemorative 90th Anniversary Nobel Prize dinner party. This marks the emergence of Yamazaki as a world leader in tableware design and manufacturing.

Every year since then, Yamazaki has supplied the tableware for every Nobel Prize dinner

party.

今後も、郷土への愛着と誇りを胸に、燕市の未来を担う人材の育成に努めて参ります。

大学院生活について

大学院 1 年 言語系教育実践コース（英語）

宮島 淳人

初夏の候、ますますご繁栄の事とお喜び申し上げます。言語系教育実践コース（英語）一年生の宮島淳人と申します。上越教育大学大学院に入学して、早くも二か月が過ぎようとしています。素晴らしい先輩・同期に囲まれ、互いに切磋琢磨しながら、充実した研究活動や日常生活を過ごしております。

私は現在、長谷川先生ゼミ（英語教育）に所属しております。今年度は、私を含めた一年生 4 人が新たに所属し、ゼミでは、全員で意見交換を行いながら、活発な議論を交わしております。長谷川先生の主な研究分野はリーディングと語彙習得であり、私もリーディングに興味があり、所属することを決意しました。これまでの“リーディング”といえば、英文和訳・和文英訳が中心となり、学習者が常に受け身で過ごしているものが大半を占めていました。しかし、学習指導要領の改訂に伴い、“主体的で対話的で深い学び”の実現が求められています。そこで、従来のようなリーディングの学習プロセスから脱却する必要があります。学習者はリーディングにおいて必要な情報を読み手自身が取捨選択し、読むことの楽しさを味わいつつ、思考力を高めていくことが主体的なリーディングの目指す姿の一つなのだと私は考えます。それゆえ、私は多読（*extensive reading*）とリーディング方略（*reading strategy*）を英語教育に関連させたいと思い、現在の修士論文のテーマとして扱っております。将来に、中学校の英語教員として現場に立った際に、修士論文の内容だけではなく修士課程でこれから学ぶ内容を実践に生かせるように、日々向上心をもって取り組みたいと考えております。

最後に、大学院で学びを深めることができることに感謝し、無駄な日々を過ごさぬように、今後の修士論文・教員採用試験に向けて取り組みたいと思います。



大学院での刺激ある日々

大学院 1 年 言語系コース(英語)
松田龍之介

上越教育大学大学院に入学して最初の学期も終盤を迎えています。これから大学院での生活、今後の研究の展望について話していきたいと思います。

入学した当初は、同期の志の高さ、先輩方の知識の豊富さに圧倒され、この先自分についていけるのかという不安がありました。しかし、せっかく大学院にまで学びに来たのだから「やるしかない！」と決意し、周りの助けも借りながら必死に勉学に励んできました。また、大場先生のゼミに入り、ここでも英語教育に関するレベルの高さや研究への情熱に日々刺激を受けています。自分の知識が浅い分野の内容においても、何か一つでも吸収しようという目標を立て、自分の研究へ生かそうと毎回のゼミを高い意識で参加しています。英語コースには、現職の先生や留学生、社会人経験のある方、教育とは全く違う分野を学んできた方など非常に多様なバックグラウンド、知識を持っている方々が集まっています。そのため新しい発見を得ることができ、楽しく日々の大学院生活を送っています。

大学時代は英語教育について学び、生徒がこれからの予測不可能な社会を生き抜くべく「主体的で対話的で深い学び」を実現するために高等学校英語指導における動画サイト TED の活用法について研究していました。エッセイライティング、ディベート、プレゼンテーションなど様々な活動と関連付け、TED Talks や TED Ed、また ICT 使用についても知識を深めました。しかし、大学院では興味がリスニングの処理プロセスへと変わりました。高等学校段階において大学入試センター試験や実用英語技能検定などでリスニング能力が強く求められているにもかかわらず、実際の授業ではあまり重点を置かれていない状況から、リスニングの処理プロセスについて学び、効果的なリスニング指導はどのように行われるべきかについて研究したいと思いました。昨今、大学入試への外部試験の導入などの改革からわかるように、授業の中でアウトプットを増やしていくことが喫緊の課題としてあり、リスニング指導が軽視されている可能性があります。そこで、もう一度リスニング指導について見直すことで技能統合型の授業を作っていく一助となると考えています。

大学 4 年の時に挑戦した教員採用試験で不採用となり、講師として現場経験を積むか、大学院へ進学し英語教育について学び直すかという選択で非常に悩んだ時期もありました。しかし今は、



上越教育大学へ進学し日々多くのことを学べることに喜びを感じています。今後も、同期の仲間、先輩方、先生方の力を借りて、教育者への道を突き進みたいと思います。

新天地

大学院 1 年 言語系コース (英語)

藤田 蒼

晴天の中、入学式を終え、数か月が経とうとしています。桜の鮮やかな色の名残が私たちの新たな芽に養分を注ぐかのようにこの時期は大学に馴染み、同僚・先輩との付き合いが開花する頃なのではないでしょうか。私自身、友人それから先輩方と上手く過ごしていると実感しています。

しかしながら不安も抱えています。その不安というのは私がこれまで修めた学問とは異なる分野を切り開いていくことです。英語、それに英語教育に関するもので、これまで国際に関わる分野、特に法律・政治・経済・哲学を幅広く勉強してきたつもりの私にとっては、大きな新大陸に漂着したような感覚です。しかし大陸間は海洋で繋がっているように学問もまた何らかの形で繋がっています。私の場合でしたら、哲学的な考え方を英語分野で大きく活かすことが出来るのではないだろうかと思っています。物事の本質を洞察する、共通理解を見出す。それらは英語教育に限らず、現代の教育全般に必要な活動だとも思っています。相対的な考え方が広まる中、多様な考え方があってももちろん良いことです。自分とは異なった意見・考えを知ることは自分の見聞を押し広げるうえで非常に重要です。しかし、最終的な答えが「人それぞれ」で終わってしまうのは本当に良いことなのでしょうか。その答えを見つけるのは容易ではありません。実際に考えていることと実践することはかなり異なります。けれども色々な意見を基に共通理解にまで会話を発展させることで、他者理解を介し、お互いに他者を尊重することにつながると思っています。常に多様性の中に共通性を探るということを心掛けていれば、より内容のある授業展開に赴き、生徒の他者理解・他者尊重の精神を育めるのではないのでしょうか。あらゆる角度から思考のアプローチを施し、本質を捉えるのが哲学だと思っています。

さて、少々堅苦しい内容になってしまいましたが、この文面を書いている私はと言いますと英語の知識をふんだんに吸収している最中です。結構大変です。しかし、その大変さが楽しさに変わろうとしている転換期にいます。その中で、いつも心に留めている言葉があります。それは「最



初は学を励み、次に学を好み、最後に学を楽しむ」という孔子の考えです。私的な捉え方ではありますが、まずは何事にも最初は要領を掴むために、頑張らなければいけないということ。その中で、勉強することの楽しさに気づき、自ら楽しんで学ぶということだと思っています。最後になりますが、短い大学院生活を通して、この境地に至ることができるように日々精進していきたくと思っています。

研究室の窓から



清泉女学院短期大学 教授
中村洋一（平成4年度修了生）

連載第7回

Bird's Eye

最近、視力の減退が進み、近視のメガネの上に眼鏡型拡大鏡を重ねないと、字が読めない。ふたつの眼鏡を重ねてかけて、猫背で文字を読んでいるスガタはコマーシャルをやっている館ひろしさんというよりも、むしろ、猫ひろしさんに近い。夕方暗くなって、研究室の電灯をつける頃になると、頭の中の飽和状態も関連するのか、特に活字を受けつけなくなる。もしかしたら、鳥目になったかあと思った。「(とりめ)は夜盲症のこと。夜になると視力が著しく衰え、目がよく見えなくなる病気。」と Wiki に出ていた。で、鳥は目が悪いんだと思っていたけれど、「よくある誤解と正しい知識」というウェブ・ページに<<http://lumens.blog.fc2.com/blog-entry-27.html>>、「『鳥』という字から全ての鳥が夜盲症だという誤解があるようですが、ほとんどの鳥が夜でも見えています」と、書いてあった。コンピュータの画面は文字を大きくすることができるし、バックライトも明るくできるので、暗くなっても良く読める。鳥目と言うより、ただのローカだなやっぱり、と思う。



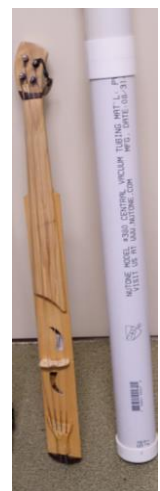
今年から、棚田で有名な姨捨というところで、我が家の三男が稲作を始める。田んぼの所有者のおじいさん（と書いた後、お目にかかる機会があったが、同世代の方だった。あっ、やっぱりおじいさんか ...）が、休耕して荒らしてしまうのも困るので、誰か作ってくれないかという話しを仲介して貰い、一反五畝の田んぼを借りることになった。一反五畝ってどのくらいの大きさなのか想像できなかったが、実際に見てみると、けっこう広い。一反は 300 坪、一畝は 30 坪だと言うから、一反五畝は 450 坪、畳 900 枚分の広さだ。もともとは田んぼだったところに花木を植え、生け花用の花や木を作っていたらしい。今は花木の根っこを除去して、田んぼとして使えるようになっている。



春先に、大きなトラクターを持っている近所のおじいさんに頼んで、田おこしをやってもらった。さくさくふっくらの、気持ち良さそうな土塊の田んぼになった。しばらくして、三男と一緒に出かけ、代掻きをする前にもう一度、我が家の小さな耕耘機で耕してみた。大きなトラクターだと 30 分くらいで済むところを、半日かかった。一度に 50 cm 幅ぐらいしか耕耘できないので、お百度参りのように、行ったり来たりで、なんとももどかしい。

耕耘していくと、その部分だけ白っぽい色から濃い茶色の帯に変化していくのが分かる。しばらく行ったり来たりを繰り返していると、なんだか良く分からないけれど、カラスやモズが集まってきた。しかも、彼らは、濃い茶色の帯の所だけに来ている。少し観察してみて、理由が分かった。耕耘したところには、土の中にいたミミズやカエルが表面に掻き出されていて、それを狙って、濃い茶色の帯のところだけに集まって来たのだ。鳥たちは、耕耘された田んぼは茶色が濃くなり、そこには必ずえさがあることを、経験を通して知っているのだろう。田んぼの上を飛び回り、下を見て、濃い茶色を認識すると、それっ!と、降りて来るのだろう。鳥は目が悪いなんて思っていたけれど、すまん、すまん、鳥だってやる時はやる。同時に、土の中でそおとしていたミミズやカエルには、悪いことしちゃったなあとも思った。すまん、すまん。

bird's eye には、「鳥眼杳」という違う意味もある。「ちょうがんもく」とは、小鳥の目のような小さな円形の斑点が、板にたくさん散らばって表われる杳目で、カエデ類の木材に多く見られ、「鳥目杳」とも書く。バーズアイ・メイプルと呼ばれる木材があり、家具や楽器などに使用されるという。自分が持っている楽器にも、バーズアイ・メイプルを使っているものがある。Traveling Fiddle という、携帯用のバイオリンで、アメリカの製作者に依頼してから 1 年ぐらいかかって、排水管のケースに入って届いた。この楽器の裏板が、バーズアイ・メイプルだった。楽器好きが集まると、裏板の杳目を自慢して、「どうだ、きれいだろう!」などと自慢し合う。くつきりははっきりとしたバーズアイなんかは、「これ、硬いぞお、響くぞお。」なんて自慢する。美しさも大事だけれど、木の硬さや杳目の詰み具合が、楽器の出す音に影響するのだそう。同じ山の、同じ種類の木でも、南向きの斜面で育った木と、北向きの斜面で育った木では、出る音が違うらしい。南の斜面のものは、暖かい陽の光を受けて成長が早く年輪の幅が広い。北側の木は寒いので成長が遅く年輪の幅が狭い。だから、北側の材木の杳目は、相対的に詰んでいて硬く、「これ、硬いぞお、響くぞお。」という自慢の根拠に



なる。この話は「木もニンゲンも、やっぱり、厳しい環境で苦勞しなきゃだめだな」と飛躍し、「いくら良い楽器でも、腕がないと、いい音は出ないよ、ちゃんと練習しなさいね」なんてからかわれたりする。あまりいい音で演奏できずに、申し訳ないとも思う。すまん、すまん。

ちょうどこれを書き始めた時、あるスピーキングテストのリリースを知らせるメールが届いた<<http://www.jiem.co.jp/press/20180521.html>>。このテストに限らず、新しい指導要領の施行や大学入試改革に向けて、英語のテストは4技能の測定・評価へと、大きな方向転換の時を迎えている。この「研究室の窓から」でも、言語テストの課題のいくつかに触れて、逆上しながら私見を書いてきたが、今回は、少し冷静に、大人になって、テストの特性を検討する際に必要な、妥当性・真正性、信頼性、実用性の観点から、主に妥当性の課題を中心に、今一度、ライティングやスピーキングといった言語パフォーマンスの測定・評価に関する論点を整理して、将来的な方向性についても考えてみたい。

妥当性とは、「測定・評価しようとしているものを本当に測定し評価しているか」という観点である。内容的妥当性、構成概念妥当性、表面的妥当性など、かつては、いくつかの下位項目に分類して妥当性を捉えていたが、昨今では、むしろ、テスト課題と目標言語使用の一致としての真正性との関わりの中で、より総括的なひとつの概念として捉えられている」（中村, p. 18）。普通、身長を測る時には身長計を使い、決して血圧計を使うことはない。身長を測るのに血圧計を使うなんて考えもしない。しかし、英語の能力を測る時に、何が「妥当で正しい測定具」となり得るかは、そう簡単には決められない。もしかしたら、英語のテストで、身長を測るのに血圧計を使っているような、ナンセンスなことをやっちゃっているかもしれない。というのも、まず、「英語が書ける・話せる」とはどういうことなのか、くっきりはっきり定義することができていないという問題がある。Bachman & Palmer (1996) 4章 ‘Describing language ability’ (pp. 61 - 132) の検討などを基にして、言語能力をいくつかの下位要素に分類してはいるが、まだまだ確定的ではなく、また「部分の総和は必ずしも全体にならない」といった問題も未解決である。極論にすぎるくらいはあるかもしれないが、幅広い意味で「言語能力」を測定・評価していくとなると、測定・評価しようとしているそのものがあきらかになっていないのだから、それを測定する道具も何を使えばいいのか、まだ定まっていないと言わざるを得ない。言語パフォーマンスの測定方法は、まだまだ未開発で、少なくとも「唯一無二の方法はこれだ!」と断言できる状態にはない。

しかし、学校教育の成果を把握するといった場面では、比較的限られた目標言語使用の具体例を列挙し、いわゆる Can-Do リストを中心にして、測定方法とその結果の評価方法を追求していくことに可能性が見えるのではないだろうか。また入学試験のような選抜テストにおいても、その後の学習に向けて必要不可欠な言語パフォーマンス技能の task 一覧をリストアップすることで、より具体的な方向性も見えるのではないだろうか。いずれにしても、テスト課題の内容と具体的な目標言語使用との関わり、つまり真正性の追求という側面から妥当性検討の糸口を捉えることができるのではないかと考えている。Can-Do リストは、一時の流行から少し停滞期に入っている感がある。また、言語能力を大雑把に、レベル分けして捉えようという傾向が強くなっているとも感じる。あまのじゃくのようなだけでも、今もう一度、Task-Based Language Assessment: TBLA (Mislevy et. al. 2001, Norris 2009)の観点も取り入れながら、具体的な言語使用の一つひと

つをリストアップして検討し、それをひとつずつ、指導・測定・評価して教育を進めていくというサイクルを、再確認することから始めたらどうかと思っている。

評価の妥当性に関わる問題では、評価に使用するデータとしての「得点」を考え直してみる必要があるのではないかと考えている。従来から、いくつかの大問にいくつかの小問があって、その正答数、あるいは、それぞれの重きをつけた配点により採点し、その合計を得点として算出するという方法が取られている。このような正答数に基づく素点を用いて様々な統計処理を検討する方法は、古典的テスト理論 (Classical Test Theory: CTT) と呼ばれているが、「受験者の得点がテストに依存する、あるいはテストやテスト項目の特性が受験生に依存するために、いくつかの欠点や限界も指摘されている」(中村, p. 1)。

このような古典的テスト理論の限界をカバーするために、項目応答理論 (Item Response Theory: IRT) の研究が進められて来た。IRT は「得点間の間隔のゆがみを補正するために自然対数を使用して変換したロジット得点を使用し、テスト項目の特性と受験者能力との関係性を、確率論として捉えるテスト理論」で、「受験者集団に依存しないテスト項目特性が算出できる、テストに依存しない受験者能力の推定値が算出できる、受験者個々の項目毎の情報量を算出できる、といった大きな利点がある」(中村, p. 7)。我が国の言語テストにおける IRT の「普及と活用」が、今後の大きな課題のひとつであろう。

素点、ロジット得点といったデータを評価する場合の、もうひとつ大きな課題は、どこまで到達したら合格、あるいはどのレベルに入ると判断するかという、「分割点 (Cut Score)」を含む、スタンダード・セッティングの問題である。あるテストで 70 点取ったら合格とすれば、69 点は不合格である。その時、70 点と 69 点の差は確かにあるのか、そこで分割できるのかということをも改めて考える必要がある。大友監修 (2009) は、従来から使用されてきたスタンダード・セッティングの方法論を概説し、「目標の到達と未到達はどうすれば判断できるか ... それができなければ、単なる表面的な解決に終わってしまう (p. 2)」と警鐘を鳴らしている。その研究は、大友 (研究代表) を経て、大友・法月・中村 (2015, 2018) へと発展し、分割点設定における Mixture Rasch Model: MRM を用いた統計処理の可能性を検討している。MRM は、単純 IRT がひとつの母集団を想定するのに対して、受験者集団の中に、潜在的な特性の異なる複数のグループが存在することを想定する項目応答理論のモデルであり、いくつかの異なる特性を持つグループの存在が推測される、多くの受験者が関わる大規模テストのデータ処理において、より正確な評価ができる可能性が高いのではないかと考えている。

学校教育における英語教育の実態を鑑みながら、今一度、「自前の Can-Do リスト」を検討し、それを中心に、TBLA の観点も検討しながら、測定・評価の妥当性・真正性を高めていくことが重要である。そのためには、スタンダード・セッティングにおける IRT、MRM といった統計的手法の追求も続けながら、妥当性・真正性を高めていく努力を続けて行く必要がある。

信頼性とは、「テスト得点が安定しているか否かを示す理論的な指標で、信頼性が高ければ、誤差得点が少なく、真の得点範囲が狭まるのでより正確な判断ができる。一方、信頼性が低ければ、真の得点範囲が広がり、そのテスト得点から正確な判断をすることが難しくなる」(中村, p. 17)。

CTT では、テスト実施後、クロンバック α 係数による信頼度係数 (reliability coefficient) を算出して信頼性の検討を行う。一般的には $\alpha \geq .800$ が目安となり、「誤差得点の可能性がどのくら

いあるのかを判断する、測定の標準誤差を算出する」が「古典的テスト理論の枠組みでは、ひとつのテストの、その受験者グループに依存する数値である」(中村, p. 11) といった制限に、注意しなければならない。一方 IRT では、情報関数という統計値で、ある項目にある受験者が応答したときに、どれだけの情報を集めることができるかという観点で信頼性の検討を行う。項目とその集合体であるテストの信頼性について、受験者それぞれにとって、推定値が算出されている項目の特性を検討すれば、どれだけ信頼性が高いかを、テスト実施前に検討することが出来る。また、モデルとの適合度という観点でミスフィット、オーバーフィットという数値の検討も可能であり、IRT の処理によって、より正確で、詳細な信頼性の検討ができる。このような統計処理をテスト開発のプロセスで取り入れることにより、より信頼性の高いテストを開発していくことができるのではないかと考える。

実用性とは、「テストの、経済性や実現可能性を検討するものであり、昨今では、コンピュータ技術発達の恩恵もあり、マルチメディア・データを使用するテスト項目や、インターネットを介在するパフォーマンス・テストなど、様々な可能性を持つ方法を使用することが可能になっている」(中村, p. 10)。全国学力テストに追加される英語の予備調査では、パソコンに接続したマイク付きヘッドホンに答えを吹き込むという方法が試された。コンピュータ機器の発達や通信インフラの整備が進みつつある現状を鑑みれば、言語パフォーマンスの測定に関する実用性のハードルはどんどん低くなっていくだろう。言語パフォーマンスの評価についても、音声認識の技術や、AI による言語処理の技術が飛躍的に発達していることを見れば、言語パフォーマンスの評価で課題のひとつになっている、人間による評価における課題への対応として、ある程度の自動採点に期待することができるであろう。スマートフォンの言語を英語に設定して、コンシェルジュのようなアプリに英語で話しかけてみると、すぐに見つけたい情報を示してくれる。そういった一方通行のシステムは、さらに、双方向の会話が可能なものへと進化し続けている。採点と評価のシステムを組み込んだ AI に話しかけて、会話をすれば、AI が「イマノセッションノヒョウカハ レベル B+デス」とフィードバックしてくれるような時代が、遠い夢物語の話ではなく、すぐに来るような予感がする。マルチメディア技術の発展とともに、言語テストの研究が協働すれば、言語パフォーマンス・テストの実用性は向上するのではないかと考えている。

Bird's Eye を辞書で引いて最初に出てくる意味は、俯瞰 (図)、鳥瞰 (図) である。4 技能の測定と評価についても、さまざまな観点を俯瞰し、全体的な検討をしていく必要があるだろう。この文章をまとめようとしていた時、「文部科学省は 5 日、全国の国公立大学に入試問題と解答を原則公表するよう求める新たなルールを発表した」というニュースが耳に入ってきた。<<https://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20180605-00000019-mai-life> 毎日新聞 2018. 06.05 取得>。そんなことをして大丈夫だろうか、と思う。なんのために、とも思う。日本の教育文化では、入学試験の問題は、実施後、かなりオープンに公表されている。利害関係の大きいテストでテスト一式が公表されるのは、国際的に見ると多数派ではない、という印象を持っている。テスト開発におけるアイテム・バンクの考え方で言えば、公表されたテスト(項目)は、その時点で「引退」である。毎年、利害関係の高い大学入学試験のテスト(項目)を引退させ続けていけば、「資源」はすぐに枯渇してしまうのではないだろうか。出題ミスを防がなくてはならないことはもちろんだが、

実施後の公表を課すことで慎重さを求めるよりも、もっと直接的にテスト開発のプロセスを充実させていくことのほうが大切なのではないだろうか。予備テストを行って、テストやテスト項目の特性を表す統計値を計算し、アイテム・バンクに格納し、目的にかなった項目を呼び出して、テストを構成していくというプロセスを経て、ミスがないのはもちろん、妥当性・真正性、信頼性、実用性の高いテストを構成していくといった、テスト開発の努力に継続的に取り組むことが重要なのではないか。また、日本では、テスト素材の著作権が話題に上ることはあるが、テスト項目そのものの著作権はあまり取り上げられず、公表された時点でパブリック・ドメインのものとして判断されてか、過去問を集めた書籍が本屋さんの受験参考書の棚に並び、データ・ベース化された過去問と解説が、オンラインで取得できるビジネスさえもある。かなりのエネルギーと時間をかけて作問したアイテム・ライターの著作権はどう処理されたのだろうか？ あっ、そうだ、大学入試で外部テストとして採用が決定している業者テストのいくつかは、従来から問題を公表していないんだけど、それは、どうするのだろうか？

最後に来て、結局、また逆上して取り乱してしまった。しかし、今後の英語教育そのものの方向性を左右する大きな転換期に、測定と評価のプロセスに関する俯瞰的な検討が、絶対に必要である。英語の測定・評価の分野でも、田んぼを茶色の帯に耕耘するように、現状の課題をしっかりと捉え、より慎重な検討をすることが必要である。その時、そおっと眠っていたミミズやカエルのように、淘汰されてしまうことがあるのかも知れない。しかし、新しい空気を入れ、水を呼び込み、新しい苗を植える時は、確実に来ている。我が家の田んぼも、代掻き、田植えを経て、緑の季節を過ごし、実りの秋に向けて作業を進めて行こう、と考えている。

参考文献

- Bachman, K. F. & Palmer, A. S. (1996). *Language Testing in Practice*. OUP.
- Mislevy, R. J., Steinberg, L. S. and Almond, R. G. 'Design and analysis in task-based language assessment' (2001).
<<http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.123.4029&rep=rep1&type=pdf>>
(2018.06.05 取得).
- Norris, J. (2009). 'Task-Based Teaching and Testing' in *Handbook of language teaching*.
<<https://larc.sdsu.edu/testassesswebinar/jnorris/Norris2009-Handbook-of-LanguageTeaching.pdf#search=%27Task+Based+Teaching+and+Testing++Norris%27>> (2018.06.05 取得).
- 大友賢二 (監修). (2009). 『言語テスト: 目標の到達と未到達』. 英語運用能力評価協会 (ELPA).
- 大友賢二 (研究代表: 日本英語教育協会委託研究). 『言語テストの規準設定』(1)・(2)・(3).
(https://www.eiken.or.jp/center_for_research/contract/ 2018.06 取得).
- 大友賢二・法月健・中村洋一. (2015). 「Mixture Rasch Model による英語能力の規準設定」(日本英語検定協会 2015 年度委託研究).
http://www.eiken.or.jp/center_for_research/contract/
- 大友賢二・法月健・中村洋一. (2018). 「Mixture Rasch Model による英語能力の規準設定」

(日本英語検定協会 2017 年度委託研究).

http://www.eiken.or.jp/center_for_research/contract/

中村洋一. 『現場の教師のためのテストイング・評価用語 100』. 英語運用能力評価協会 (ELPA).

編集後記

6月のうちに関東甲信地方の梅雨明けが宣言され、梅雨をあまり実感しないまま夏を迎えました。上越の夏の暑さを今でも思い出します。原稿をお寄せくださった3名の院生の皆様は全員1年生ですが、上越の夏の暑さを現在進行形で体験されていることでしょう。本学会のニューズレターは毎年2回、7月の学会前とクリスマス前を目安として発行しています。7月に発行を設定したのは、学会前にお届けし、そのうえで原稿をお寄せいただいた皆様にお目にかかりたいという編集担当者の気持ちがあるからです。今年も高田駅前前のAホテルに宿をとりました。皆様にお目にかかるのを楽しみにしております。

(編集委員 H.I.)



2018年7月5日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子 (上越教育大学)

野地美幸 (上越教育大学)

飯島博之 (埼玉県立大学)
